接近的・回避的欲望に関する調査(1)

欲望間での欲望と葛藤の強さの違い

○後藤崇志^{1, 2}・小林麻衣³・尾崎由佳⁴・楠見 孝¹

(¹京都大学大学院教育学研究科・²日本学術振興会・³東洋大学人間科学総合研究所・⁴東洋大学社会学部)

キーワード：欲望, 接近・回避, 潜在意味解析

Desires for approach and avoidance (1): The differences in the strength of desire and conflict across various desire domains

Takayuki GOTO^{1, 2}, Mai KOBAYASHI³, Yuka OZAKI⁴ and Takashi KUSUMI¹

(¹Graduate School of Education, Kyoto Univ., ²JSPS, ³Institute of Human Science, Toyo Univ., ⁴Faculty of Sociology, Toyo Univ.)

Key Words: desire, approach/avoidance, latent semantic analysis

目 的

欲望(desire)は行為を促し、人の生存のために重要な要素である。一方ですべての欲望に従うことは、規範の逸脱や不健康な状態につながる危険性もある。セルフ・コントロール(self-control)研究は、目標や規範のある状況での欲望対処に関わる心理過程を記述してきた(e.g., Fujita, 2011)。しかし日常生活では様々な欲望を経験するにも関わらず、従来のセルフ・コントロール研究では特定の欲望を対象とした実験で得られた知見が他の欲望にも適応可能であるかのように解釈されている現状がある。Hofmann et al. (2012)は日常生活で経験される様々な欲望の経験を収集し、欲望の強さや葛藤の強さなどについて欲望間に質的な特徴の違いが見られることを報告している。本研究では欲望を「したい」と望む接近的欲望と「したくない」と望む回避的欲望として分類し、既発表データの二次分析により(1) Hofmann et al. (2012)の概念的追試として接近的欲望の質的な差異を検討する。(2)回避的欲望の質的な差異を検討する。(3)接近的欲望と個人的目標との葛藤状況における欲望の質的な差異を検討する。

方 法

分析対象データ 検討(1)(2)については、本大会の別発表(小林他(2014)、尾崎他(2014))で報告されている896名を対象としたインターネット調査のデータを用いた。当調査では、調査時に感じている接近的欲望(今すぐに「したい」と思っていること)について自由記述を求めた後、欲望の強さ(すぐに実行したい気持ちは強い)、葛藤の強さ(すぐに実行することにはためらいがある)などの質問に7件法で回答を求めた。また、調査時に感じている回避的欲望(今、「やらなければならない」けれどすぐには「したくない」こと)についても自由記述を求めた後、同様に欲望の強さ(「したくない」という気持ちは強い)、葛藤の強さ(すぐに実行しないことにはためらいがある)などの質問に7件法で回答を求めた。

検討(3)については、後藤・楠見(2013 日本社会心理学会第54回大会)で報告されている1500名を対象としたインターネット調査のデータを用いた。当調査では1週間以内で感じた欲望と目標の葛藤経験(“自分のしたいこと”と“自分の目指していること”で迷った経験)について自由記述を求めた後、欲望の強さ(“自分のしたいこと”をしたい気持ちは強かった)、葛藤の強さ(“自分のしたいこと”と“自分の目指していること”で迷う気持ちは強かった)などの質問に7件法で回答を求めた。

結 果

両データについて自由記述の回答が不適切なものを除いた上で潜在意味解析と階層クラスタ分析を加えた結果を参考に検討(1)の接近的欲望は25カテゴリ、検討(2)の回避的欲望は21カテゴリ、検討(3)の目標は14カテゴリ、欲望は18カテゴリに分類した。検討(1) 接近的欲望では欲望の強さと葛藤の

強さの間の相関は弱く($r = -.08$)、欲望カテゴリ間での欲望の強さと葛藤の強さにも明らかな線形関係は見られなかった(図1)。検討(2) 回避的欲望では、欲望の強さと葛藤の強さの間に弱い正の相関が見られ($r = .20$)、欲望カテゴリ間での欲望の強さと葛藤の強さの間にも線形関係が見られた。検討(3) 葛藤経験では(2)と同様に、欲望の強さと葛藤の強さの間に弱い正の相関が見られ($r = .22$)、欲望カテゴリ間での欲望の強さと葛藤の強さの間にも線形関係が見られた。

考 察

検討(1)より接近的欲望では欲望の強さと葛藤の強さは線形関係になく、欲望間に質的な特徴の違いがあることが示唆された。「遊ぶ」「睡眠」「のんびりしたい」の葛藤の強さが全体平均よりも高い傾向にある点は、Hofmann et al. (2012)で見られた“Leisure”や“Sleep”は葛藤が強いという傾向とも一致する。他方で、「スポーツ」「趣味」の葛藤の強さが全体平均より低い傾向は彼らの研究報告とは異なる。前者は記述が抽象的なものが多い一方、後者は「テニス」「ゴルフ」など具体的な記述が多い傾向が見られ、欲望として認知された際の活動内容の具体性が影響している可能性が考えられる。また、検討(2)で回避的欲望は欲望の強さと葛藤の強さに線形関係が見られている。回避的欲望は質的差異よりも量的差異の方が強いようにも見える結果である。しかし検討(3)の葛藤経験でも同様の傾向が見られ、本研究で扱った回避的欲望の質問は目標との葛藤構造を含んでいたため、回避的欲望の特徴であるとは言い切れない。葛藤構造を持たない回避的欲望が存在し得るか、という点も含めて今後考察していく課題である。

図1. 検討(1)における欲望カテゴリ間の欲望の強さ、葛藤の強さ、経験報告数を示すバブルチャート